

もし、あなたなら～6つの視線

2005(平成17)年5月3日鑑賞(OS劇場C・A・P)

★★★★



『彼女の重さ』監督＝イム・スルレ／出演＝イ・ソリ『その男、事情あり』監督＝チョン・ジェウン／出演＝ピョン・ジョンス／ペク・チョンハク『大陸横断』監督＝ヨ・ギュンドン／出演＝キム・ムンジュ『神秘的な英語の国』監督＝パク・ジンピョ／出演＝キム・セドン／トン・ヒョヒ／キム・スミン『顔の価値』監督＝パク・クァンス／出演＝チ・ジニ／チョン・エヨン『N.E.P.A.L. 平和と愛は終わらない』監督＝パク・チャヌク／出演＝チャンドラ・クマリ・グルン(キノ・キネマ配給／インディー・ストーリー海外配給／2003年韓国映画／110分)

……2001年11月に設置された韓国の人権委員会が人権をテーマとして6人の「386世代」監督にプロデュースをすべてまかせて製作したオムニバス映画がコレ。短編ながら、それぞれの作品が示す問題提起は新鮮かつ強烈で、韓流の魅力は『冬ソナ』ばかりではないことを見事に示すもの。私的には、オバちゃんたちもこんな映画を観て、さまざまな人権問題について真剣に社会的な発言をしてもらいたいと願っているのだが……。

最近のオムニバス映画比較

オムニバス映画は昔からたくさんあるが、私は基本的にあまり好きではない。だって、せっかく2時間の時間があるのだから、わざわざ短編をいくつか入れ込まないでも、1本のまとまったものをつくった方が観客に対して感動を与えやすいのでは、と思うから。しかし、テーマを1つに決めて数名の監督がそれぞれの視点で短編をつくり、それをまとめると面白い対比ができるのも道理。果たしてこの韓流オムニバス映画は……？

企画・製作は韓国人権委員会だが……？

企画・製作は、人権専門の国家機構として2001年11月26日に発足した韓国の人権委員会。この国家機構が、「大衆の人権意識を高めるため、やさしく多様に接

近できる媒体である映画に注目して『人権映画プロジェクト』を企画した」結果、2003年にできたのがこの映画だ。こう聞くと、官製のお仕着せ作品ではと思ってしまうが、映画づくりにおいては今や韓国の方が日本より数段うわ手……？

この人権委員会のプロジェクトに韓国の実力派監督6名が結集したが、その際「その内容にはいっさい口出ししない」という条件が定められたとのこと。そうそうたる監督が人権をテーマとして自由に短編をつくった結果完成した映画だから、完成度の高さは抜群！「自由の中にこそ才能が生きる」ということが、この映画を観ればよくわかるというもの。以下1つ1つ私なりのコメントを……。

タイトル通りの面白さとモノ悲しさ……？

エピソード1『彼女の重さ』

『彼女の重さ』は、女子高生の容姿（スタイル・体重）をテーマとしたものだが、今や整形美人やプチ整形が当たり前となっている韓国においてはきわめて現実的で深刻な問題提起。短い時間の映像の中でアピールしたいことをうまくまとめるものだと感心。テーマがテーマだけに、「なるほど、なるほど」とわかりやすく、一面では笑いを誘うような出来に仕上がっているが、よく考えてみると、その訴えている内容は深刻でモノ悲しく、さらにコワイ、コワイもの……？

日本もいずれこうなる……？

エピソード2『その男、事情あり』

『その男、事情あり』はホントはシリアスな映画で、人権委員会がとりあげるテーマとして最適のもの。日本でも現在焦眉の課題として議論の的となっている「性犯罪者の犯歴公開の是非」だ。舞台は美しいもののかなり無機質な近未来の高層マンション。真ん中には大きな吹き抜けスペースがあり、住人たちはお互いを監視できるようになっている。そして各階の壁にはさまざまな道徳的標語が大きく書き込まれている。そして、1人の男の部屋の玄関には指紋が掲げられてあった。この男は最近、性犯罪者の公表サイトに掲載されていた人物というわけだ。こんな男に、おねしょをするために母親からいつも叱られている男の子が興味を示した。韓国にはおねしょの罰として「塩もらいの罰(?)」というのがあるら

しいので、それを勉強することが必要だが、ちょっとコワイよ……。

身障者をテーマとした映画は韓国がリード

エピソード3 『大陸横断』

身障者を描いた韓国映画には、若き日の安聖基が身障者に扮した『神さまこんにちは』(87年) (『シネマルーム2』232頁参照) やムン・ソリが神がかり的な体あたり演技で脳性麻痺の女性を演じて、「ベネチア国際映画祭新人俳優賞」をはじめ、「春史羅雲奎映画芸術賞女性演技賞」「映画評論家協会賞主演女優賞」等数々の賞を総ナメにした『オアシス』(02年) などがあるが、これらはいくまで役者が主人公。これに対して、『大陸横断』は本物(?)の脳性麻痺の男性が主人公。

この『大陸横断』が描くテーマ(人権問題)はシンプル。すなわち健常者と身障者との間に垣根をつくり、心の交流を隔てているものは一体何なのかということ。これを14分という短編の中で実に巧妙に教えてくれる。現実には脳性麻痺の障害を負っている男性の日常生活の中から選ばれて映像化された11のエピソードが説得力をもって観客に訴えかけてくる。それにしても、『大陸横断』とは何とも絶妙なうまいタイトルをつけたもの。その意味は映画を観てのお楽しみ……?

これはコワイ、これは本当……?

エピソード4 『神秘的な英語の国』

『神秘的な英語の国』は、教育熱心な国、韓国の「病理現象」を生々しく描いたもの。子供の英語の発音を良くするためには舌の手術が必要……? 舌の整形手術によって、よりネイティブ・イングリッシュに近い発音が可能になるのなら……? 子供の痛みは一時のこと。親は嫌がる子供を励まし、医者もやさしく子供のご機嫌をとりながら……?

しかし、これはまさに病んだ現代を象徴する残酷なストーリーではないだろうか……? 昔、『世界残酷物語』(62年)という名作があった。今ではすっかりスタンダード・ナンバーとなった美しい音楽とは裏腹に、地球のアチコチで現実に行われている人間の営みの残酷さを描いたショッキングな映画だったが、この『神秘的な英語の国』は、まさに現代版の『子供残酷物語』ではないだろうか?

美人は得、それとも損……？

エピソード5 『顔の価値』

これはエピソード1の『彼女の重さ』と同じようなテーマだが、その視点は全く異なり、顔の美しい女性は高慢チキか？というテーマ。それを自分はハンサムだと思っている男性の目から皮肉っぽく描いたもの。葬儀場の駐車場の料金所の係員といえば、普通は職場をリタイアしたおじさんを思い浮かべるが、なぜかこの映画ではそれが若い美人。別に美人が料金所の係員になってはダメという法律があるわけではないが、ドライバーとしてはちょっと意外な感じであらうか？とみたくなるのもわからなくもない……。しかし、それに対して美人係員がとった行動は……。普段なら特に気にならないことでも、気分がイライラしている時は、ついこれがカンに触って……。客観的にみればつまらない口ゲンカだが、本人たちは真剣で次第にエスカレート。しかし実はその美女は……。ホラー映画的な終わり方には少しガクッときたが、面白いテーマであることはたしか！

あらためて法廷通訳の重要性を認識！

エピソード6 『N.E.P.A.L. 平和と愛は終わらない』

『N.E.P.A.L. 平和と愛は終わらない』は、法廷通訳を養成する学校で過去3回講義してきた弁護士の私にとっては、本来の「仕事上」の目からみても大変生々しい映画。通訳があまりにもひどかったために大事件となった、「メルボルン事件」というものがある。これはオーストラリア旅行をするためにメルボルンに向かった5人の日本人観光客が、中継地のクアラルンプールでスーツケースを盗まれたためガイドから新しいスーツケースを贈られたところ、メルボルン空港に到着してみるとそのスーツケースの中からヘロインが発見されたという、この映画と同じような事件。彼らはスーツケースにヘロインが入っていることなど全く知らなかったが、オーストラリアの法廷通訳の語学力がひどく不足していたため、自分たちの主張が検察官に伝わらず、4人が懲役15年、1人が懲役25年の実刑判決を受けることになった。彼らの救済のために大阪弁護士会の山下潔弁護士らが献身的な活動を続けたことによってやっと「解決」したが、大きな傷跡が残った

のもこの映画と同じ……。

28分という比較的長い短編で描かれるネパール人のチャンドラさんというおばさんが、6年4カ月もの間、誤って精神病院などをたらい回しにされていたというこのお話は、実話にもとづくもの。この深刻な人権問題を、あの『JSA』（00年）や『オールド・ボーイ』（03年）のパク・チャヌク監督が感動的に映画化している。これは必見だよ……。

「386世代」とは？

韓国人権委員会の企画・製作であっても、それが月並みな官製映画にならなかったのは、6人の「386世代」監督の実力によるもの。韓国の「386世代」とは、「現在30代で（現在では40代も多くなりつつあるが）、80年代民主化の時代に学生時代を過ごし、60年代に生まれた人達」のこと。彼らが人権をテーマに描いた6つのオムニバス映画は、ユニークな視点から、容姿差別、身障者差別、性犯罪者差別、人種差別などの問題提起をスクリーン上で見事に展開させていくが、その技量はとにかく大したもの。

おばちゃんたちも、ちょっと異質な韓流モノを……

この映画は2003年に製作されて、第8回釜山国際映画祭韓国映画パノラマ部門でNETPAC賞（アジア映画振興機構賞）やスペシャルメンション賞を受賞し、各国で上映されている作品。今回OS劇場C・A・Pでモーニングショーとして上映されたが、公開はこれだけで、韓流ブームに沸く日本でもマイナーな扱い。同時期に公開されたイ・ビョンホン主演の『甘い人生』が多くの映画館で上映されているのとは対照的。

5月1日に観た『甘い人生』は、観客席の98%が女性（オバちゃん？）客。『冬ソナ』もいいし、この『甘い人生』もいい。そして現在テレビ放映されている『宮廷女官チャングムの誓い』もいいけれど、それらとは異質ながら、こんな気の利いた問題提起型韓国映画があるということもお忘れなく。日本のオバちゃんたちにも、こういう映画を是非観て考えてもらいたい。だが……？

2005(平成17)年5月6日記